

「講談」や「落語」は、ぼんやりしていると権威的で惰性的な空気の死毒に犯されやすい分野だと思う。しかし「自分自身が伝統になれ」「モーレツに素人たれ」等、誇り高く炸裂する数々の岡本太郎の言葉の如く、自分自身で決意をすれば、確実に開かれていく世界がある。今回は寄席文化である落語と講談を通じて、「太陽の塔」に貫かれた「岡本太郎」の思想、そこに通じていく母「岡本かの子」の仏教精神、さらには漫画・小説の分野を切り開きながら岡本家の家長として一家の芸術運動を支えていった父一平の大きな愛に思いをよせ、新感覚にその物語を伝えます。ぜひお越しください。

落語家 桂春蝶 / 講談師 神田京子

「太陽の塔」の立つ丘の麓（大阪府吹田市山田）に生まれる。1994年 三代目桂春団治に入門し、同年「二代目桂春蝶追善興行」で初舞台を踏む。2007年になにわ芸術祭奨励賞、2009年になにわ芸術祭審査員特別賞を受賞。同年8月30日、大阪松竹座で三代目桂春蝶襲名披露公演を開催し、京都南座をはじめ全国20か所でも襲名公演を行う。さらに繁昌亭大賞爆笑賞、2013年には咲くやこの花賞大衆芸能部門を受賞。2015年 上方落語家として初めてフェスティバルホール（2700席）で独演会を開催し、満員の観客を魅了。近年は「桂春蝶の落語で伝えたい想い。」をシリーズ化し、社会や歴史、人間の命を題材とする新作落語を次々と発表。落語の枠を超えた芸術表現を通して、「命とは」「生きるとは」「真実とは」という普遍的な問いを観客に投げかけ続けている。シリーズ第10作では、太陽の塔が誕生するまでの岡本太郎の思想を深く掘り下げた長編落語を制作。大阪・心斎橋 PARCO「SPACE14」にて一週間の連続公演を成功させ、その感動は観客から観客へと広がり、各地から寄せられた声に応える形で公演が続いている。太陽の塔の麓に生まれた自分の運命を受け止め、受け入れ、自身の人生と重ね合わせた集大成として、岡本太郎の精神を唯一無二の落語の形で現代に伝えている。

1999年 大学時代に岡本太郎著『自分の中に毒を持って』に感動し、「迷ったら危険な道を選べ」という言葉に導かれ、当時まだあまり注目されていなかった講談の道を選ぶ。最晩年の二代目神田山陽に入門し、山陽他界後は神田陽子に師事。2014年 日本講談協会・公益社団法人落語芸術協会にて真打に昇進。2020年「育児をきっかけに視点を変えたい」と新天地・山口へ移住。山口市で子育てをしながら東京との二拠点生活を送り、地域で肌に感じたことや、東西二つの土地を行き来する中で得た視点を講談に生かしている。2021年『金子みすゞ伝～明るいほうへ～』他で令和3年度（第76回）文化庁芸術祭賞優秀賞、令和3年度岐阜県芸術文化奨励を受賞。移住後は山口県内6か所で地域寄席を展開し、そのいったんの集大成として山口と東京の双方で、客席1300人規模の大独演会を成功させた。中央から地方へ一方通行に届けるだけでなく、地方から中央へ発信していく循環的な公演の重要性を訴え続けている。2024年には岡本かの子著『仏教人生読本』に感動し、新作講談『岡本かの子伝～母性愛～』を初演。岡本太郎の言葉から始まった講談人生は、母・かの子の思想との出会いによって新たな広がりを見せている。伝統と現代、地方と中央を結ぶ独自の視点で、講談の可能性を切り開く活動を続けている。

桂春蝶

かつらしゅんちよう

神田京子

かんだきようこ

